

## 動物園の屠体給餌によるシカ捕獲個体の有効活用について

関東森林管理局 天竜森林管理署 主事（森林育成） 上木屋 健

### 1 課題を取り上げた背景

現在シカによる林業被害が問題になっており、各地でシカの捕獲を積極的に実施している中、今後更なる捕獲圧の強化が求められていますが、一方で捕獲されたシカの利用率は低位にとどまっており、シカ捕獲個体の有効活用が捕獲圧の強化とともに求められています。

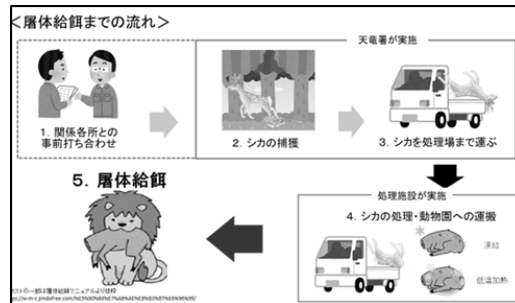
そこで今回注目したのが「屠体給餌（とたいきゅうじ）」によるシカ捕獲個体の利用です。屠体給餌とは、屠殺したシカなどの大型動物を、毛皮や骨がついたほぼそのままの状態動物園等の肉食獣に与える給餌方法のことです。

屠体給餌による利用は、肉食獣に与えるものなので止め刺しの制限が少ない等、ジビエよりも活用のハードルが低くなります。このことから、屠体給餌ならば、国有林としてもシカ捕獲個体の活用ができるのではないかと考え、実施するに至りました。

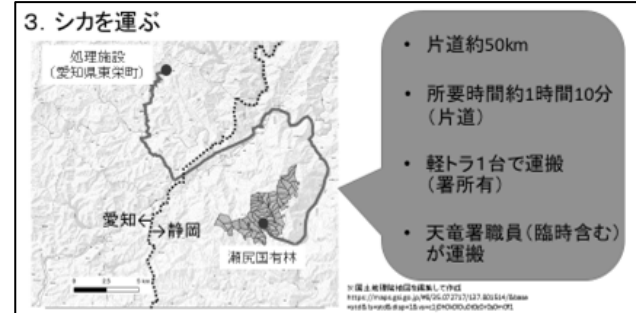
### 2 取組の経過

屠体給餌を実施した際の大きな流れを説明します（図1）。流れとしては、

①動物園（豊橋総合動植物公園）やシカの処理施設（（株）野生動物命のリレーPJ）等の関係各所との打ち合わせ→②シカの捕獲（職員実行）→③シカを処理場に運ぶ（図2）→④シカの処理・動物園への運搬を行う→⑤屠体給餌の実施、という工程で屠体給餌の実施に至りました。このうち天竜署として



（図1：屠体給餌までの流れ）



（図2：シカを運んだ工程）

### 3 実行結果

以上の工程を踏まえて、屠体給餌によるシカ捕獲個体の利用を試みた結果、職員実行で実施した58日間で捕獲した25頭のうち、10頭を処理施設に運ぶことができました。

### 4 考察

今後の展望として、捕獲者である天竜署は、屠体給餌の継続が必要なのはもちろん、職員実行だけではなくシカ捕獲委託事業においても、屠体給餌を実施できるような体制づくりが必要です。次に、屠体給餌を実際に行う動物園としては、屠体給餌を実施する肉食獣の種類を増加させること等により、需要の拡大が求められます。そして、動物処理施設には供給先の拡大が求められています。

将来的に上述した内容で屠体給餌が拡大するためには、屠体給餌にかかる各種単価を細かく設定することが必要だと思います。また、屠体給餌の継続・拡大を図っていくためには、生命倫理だけではなく、一定の利益が生まれるような仕組みも必要だと思います。採算が取れるかどうか不透明な状態では、新規参入も見込めません。

将来的に利益面が改善され、屠体給餌によるシカ捕獲個体の活用がどんどん普及していけば、それが間接的にシカの捕獲数を増加させることにも寄与するのではないかと思います。

屠体給餌に協力できた部分は①・②・③の打ち合わせ・シカの捕獲と運搬でした。